博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）望月圭子

学位申請者　　福田　翔

論　文　名　　中国語の可能補語〈-得了/-不了〉と〈-得/-不得〉—可能とモダリティ—

【審査結果】

本論文は、中国語の可能補語のなかでも、中国語学習者にとっては習得が難しい可能補語〈-得了/-不了〉及び〈-得/-不得〉の意味記述及び統語的特徴について体系的に論じ、さらに、「可能」を基本義として表す両形式が、「可能からモダリティ」へと意味拡張される言語現象について論考した論文である。

〈-得了/-不了〉及び〈-得/-不得〉は、従来の中国語学において、断片的にしか研究されていなかったが、本論文は、大量の中国語コーパスに基づく用例を考察し、日本語訳や注釈を丁寧に付し、丹念に〈-得了/-不了〉及び〈-得/-不得〉の意味記述と分析を行った体系的研究として高く評価される。さらに、本論文は、中国語学の可能補語研究における学術的貢献のみならず、一般言語学的な視点から、「可能」という形式がどのように多様なモダリティ的意味を獲得しうるのかという研究としても、独創的な論考を提示している。

最終試験においては、質疑応答を通して、福田氏は各審査委員からの質問に対して的確に自身の分析を論述し、さらに論文の今後の課題に対して冷静に自己評価しており、今後の研究を着実に発展させていく優れた研究者としての資質がうかがえた。

審査委員会は、望月圭子を主査とし、本学からは、三宅登之教授・川村大教授、学外からは、中国語と日本語の可能表現の研究者である張威教授（日本語学/中日対照言語学・中国人民大学）、杉村博文教授（中国語学・大阪大学）を副査とする計五名の委員より構成された。

審査委員は、論文審査と最終試験の結果にもとづき、全員一致で福田翔氏に博士（学術）の学位を授与することに合意した。

【論文の概要】

本論文は、全七章から構成されている。第一章は問題提起・先行研究の紹介の序論、第二章は「可能を表す〈-得了/-不了〉と〈-不得〉」の体系的意味記述と文法的特徴の論考、第三章は「義務的モダリティを表す〈-不得〉と〈-不了〉」、第四章は「認識的モダリティを表す〈-不了〉」、第五章は「第五章〈-得了/-不了〉と〈-得/-不得〉の中心的意味」、第六章は「可能から認識的・義務的モダリティへ」、そして第七章が結論という構成からなる。

第一章序論では、①研究の目的と方法、②可能補語の位置付け、③可能補語の分類に関する主な先行研究として、丁声树他 (1961)・Chao Yuan Ren (1968)・刘月华 (1980), 刘月华他(1983, 2001)等の丁寧な紹介、④可能補語〈-得了/-不了〉と〈-得/-不得〉の諸特徴、⑤収集データの出典（現代中国語大規模均衡コーパスである北京大学漢語言語学研究センター作成『CCL コーパス』、《中国语补语例解》(侯精一他 2001)）について論述している。

第二章「可能を表す〈-得了/-不了〉と〈-不得〉」では、両形式の可能の意味と構文的特徴の相違について論述している。

まず、〈-得了/-不了〉は、「状況可能」を表し、「動作主体が意図的に動作行為を行おうとしたとき、ある一時的な条件が要因で、その事態が実現する或いは実現しないという状況にある」ということを表す。〈-得了/-不了〉は、動作主体の「意志性」(volitionality)及び「事態の実現」という素性が可能の意味の成立に中心的に関わっており、更に一時的な条件のもとで用いられるという特徴が加わっている。

一方、〈-不得〉は〈看不得: 見ていられない〉のように「心理的不可能」、即ち「知覚主体の許容・受容」の意味をもつとしている。但し、〈-不得〉は、主題構文においては、<冷茶是万万喝不得>（冷たいお茶は絶対に飲んではいけない）と、不許可・禁止の解釈となり、心理的不可能の意味とはならないことを指摘している。

さらに、両形式の特徴を、先行述語の種類と意味素性、「主題文」という観点からみた文法的・構文的特徴も視野に入れて、以下の表１のように分析し、「状況可能」の〈-得了/-不了〉は、「心理的不可能」の〈-不得〉よりも構文的な制限が少ないという特徴をもつと述べている。

(表 1) 可能を表す〈-得了/-不了〉と〈-不得〉の文法的・構文的特徴

		可能	
可能補語	形式	〈-得了 / -不了〉	〈-不得〉
	意味	「状況可能」	「心理的不可能」
先行述語	意味素性	意志性	意志性
		働きかけ	許容・受容
	種類	動作動詞	動作動詞の中の知覚を表す動詞<看不得：みていられない)
構文的特徴	有題文の義務性	非義務的	不可 (必ず無題文)
文法的特徴	義務的な要素	—	—

第三章「義務的モダリティを表す〈-不得〉と〈-得了/-不了〉」では、両形式が、「許可」「必

要」といった義務的モダリティを表す用例について論考し、〈-不得〉が「不許可」、〈-不了〉が「不必要」という意味を担うとし、両形式の意味機能の特徴を以下の表２のように分析している。

(表 2) 義務的モダリティを表す〈-不了〉と〈-不得〉の文法的･構文的特徴

		義務的モダリティ	
可能補語	形式	〈-不了〉	〈-不得〉
	意味	「不必要」	「不許可」
先行述語	意味素性	意志性	意志性
	種類	動作動詞の中の使用･消費を表す動詞<花不了>	動作動詞 (形容詞)
構文的特徴	有題文の義務性	義務的	義務的
文法的特徴	義務的な要素	数量の目的語要素への付加	—

不許可を表す〈-不得〉は動作動詞を先行述語に取り、不必要を表す〈-不了〉は使用･消費を表す動詞を先行述語に取る。また、不必要を表す〈-不了〉は、数量表現を必ず目的語位置に取る。このように、不許可の〈-不得〉は、先行述語が意志性を有する動作動詞であれば成立し、その制約は非常に緩やかであるが、不必要の〈-不了〉は数量表現が必須であるという分析を行っている。

第四章「認識的モダリティを表す〈-不了〉」では、〈-不了〉が「～であるはずがない」という認識的モダリティとして機能する場合について、「蓋然性」と「推断」に下位分類し、その相違が先行述語の継続性/非継続性によると論じ、次の表３のような分析をしている。

(表 3) 認識的モダリティを表す〈-不了〉の文法的･構文的特徴

		認識的モダリティ	
可能補語	形式	〈-不了〉	〈-不了〉
	意味	「蓋然性」	「推断」 (論理的推論，様態)
先行述語	意味素性	非意志性	非意志性
		非継続性	継続性
	種類	非継続非意志動詞 <赢不了>勝てないだろう	静態形容詞 <轻不了>軽いはずがない
構文的特徴	主題構造の義務性	非義務的	(義務的) <这箱子轻不了> このトランクは軽いはずがない

第五章「〈-得了/-不了〉と〈-得/-不得〉の中心的意味」では、〈-得了/-不了〉と〈-得/-不得〉の意味機能についての分析を総括し、両形式が内包する多義性が、どのように可能の意味からモダリティの意味へと意味拡張していくのかについて問題提起している。

第六章「可能から認識的・義務的モダリティへ」では、〈-不了〉の認識的モダリティの「蓋然性・推断」の用法、及び〈-不得〉の義務的モダリティ「不許可」の用法は、ともに状況可能に由来することを、通時的視点を加えながら、「状況可能」の意味からモダリティの意味への意味拡張について論じている。

第七章「結論」においては、〈-得了/-不了〉及び〈-得/-不得〉の意味機能、「状況可能から義務的/認識的モダリティへの意味拡張」について総括し、今後の課題について論考している。

【講評】

本論文は、従来の中国語学において、断片的にしか研究されていなかった可能補語〈-得了/-不了〉及び〈-得/-不得〉の意味記述及び統語的特徴について体系的に論じ、さらに、「可能」を基本義として表す両形式が、「可能の意味から義務的・認識的モダリティ」の意味へと意味拡張する現象について分析した意欲的な論文であり、中国語学・言語学の領域において学術的な貢献が認められる。

各審査委員から高く評価された点は以下のようにまとめられる。

(1) 大量の中国語コーパスに基づく用例を丁寧に考察し、さらに全ての中国語例文に日本語訳・言語学的見地からの注釈を丁寧に付し、丹念に〈-得了/-不了〉及び〈-得/-不得〉の意味記述と分析を行った体系的研究として高く評価される。

(2) 両形式の多義性の記述的研究にとどまらず、〈-得了/-不了〉及び〈-得/-不得〉の多義性が、どのような構文的特徴・動詞の語彙的特徴と関連しているのかについて検証している点が高く評価される。例えば、主題構造、条件構文、数量詞を伴う目的語との共起、動詞の「意志性」「継続性」、「知覚動詞」との関連から、〈-得了/-不了〉及び〈-得/-不得〉の意味の相違を導き出している点が高く評価される。

(3) モダリティの概念を、言語学・日本語学・中国語学における先行文献を丹念に読み込み紹介しながら、〈-得了/-不了〉及び〈-得/-不得〉が可能からモダリティ的意味を獲得する現象と関連づけて論理的に論じている点が高く評価される。

(4) 幅広い先行研究を丁寧に紹介し、意味拡張・文法化という現象を、通時的な視点からも論じている点が高く評価される。

以上の点が高く評価された一方で、各委員からいくつかの疑問点や再考すべき点が、指摘された。指摘を以下にまとめる。

(1) 本論文で扱われた〈-得了/-不了〉及び〈-得/-不得〉が、可能補語という位置づけのなかで、どのような位置づけであるのかを先に述べたほうがよいのではないか。中国語母語話者としては、〈-不得〉は、可能というよりも、「禁止」の意味が中核的な意味として存在すると感じられる。例えば、<这个孩子说不得，打不得。>は、「この子供は、説教しても、体罰をしてもいけない（なぜなら、この子の性格では、説教したり体罰をすると、大変なことになるから）」という意味となる。さらに例を挙げると、<这把刀绝对磨不得。>は、「このナイフは、砥いではいけない（なぜなら、砥ぎすぎて刃が薄くなっているから）」という意味である。つまり、主体の属性にかかわるある前提のもとに、ある行為を禁止する、という意味をもつ。「可能」と「禁止」の関連性については、日本語においても、「この魚は食べられんよ」というように、魚の属性・状態から、「食べてはいけない」という禁止の意味が生じる。こうした意味を〈-不得〉がもつとすれば、第一に、〈-得/-不得〉をなぜ可能補語とみなすのか、第二に、可能補語として扱うとすれば、〈-不得〉がもつ「禁止」の意味と、「可能」の意味は、どのような関連があるのかについて、より詳しい議論があったほうがよいと思う。

(2) 先行研究について、詳細な紹介があるが、各先行研究について、自分なりの論評が付されていると、議論がより明確になった。

(3) 「可能」という中核的意味から「モダリティ」への意味拡張への議論において、「可能補語そのものの意味拡張」なのか、「先行する述語の語彙的意味による意味拡張なのか」について、さらに検証すると、さらに深い議論ができたと思う。特に「命題」(proposition)という意味役割を目的語としてとるような述語を先行述語としてとる用例を、『CCL コーパス』で検索し検証することも、今後の研究としては必要と思われる。

(4) 可能補語の意味拡張において、「文法化」「意味の漂白化」という議論に視点が置かれているが、通時的には、<-了>及び<-得>が、可能補語になる前に、動詞そのものからの文法化が起こっている可能性がある、という点も視野に入れたほうがよい。

(5) 「可能からモダリティ形式への意味拡張」という本論の趣旨であるが、意味の拡張過程で、「一般的意味拡張」と「他の形式との共時的競合による意味拡張」があるのではないだろうか。とすれば、後者の可能性についても検証も今後の研究課題としてほしい。

(6) モダリティ概念には、大きく以下の二種類がある。

① 非現実の事柄をとらえるときのさまざまな意味

② 命題内容に対する話し手の何らかの態度

本論文では、〈-得了/-不了〉及び〈-得/-不得〉の「可能からモダリティ形式への意味拡張」を、主に②の「命題内容に対する話し手の何らかの態度」という視点から、論考しているが、①の「非現実性」という視点から両形式の意味拡張を論考しても、より説得力のある議論になるのではないか。今後の課題としてほしい。

【総合的判断】

以上のように、本論文は中国語学における「可能補語」研究、一般言語学における「可能からモダリティへの意味拡張」研究に大きく寄与する論文である。審査委員から指摘された疑問点や再考すべき点も、本論文の学術的価値を認めたうえで、今後の研究課題、別の視点からの論考を提示し、今後の発展を期待するという性質のものである。

福田氏は、以上の指摘に対しても、的確に理解し、自身の考えを述べ、自身の論文における不備についても既に深く思考しており、さらに今後の研究課題として発展させていく姿勢を示した。

学位請求論文の学術的価値、最終試験における的確な応答を総合的に判断して、審査委員全員一致で、福田翔氏に博士（学術）の学位に授与することがふさわしいという結論に達した。

以上